

## 巻頭言

# 働く人に寄り添う労働安全を目指して

Well-being の定量化と行動分析学による職場環境の最適化

北 條 理恵子



機械安全の実務／専門家の方々と何年か仕事をして、機械で安全を担保することに粉骨砕身していること、「人の注意力に頼る安全」から、より確定性の高い「機械に任せる安全」にすることが効果的で確実にしていることを理解・納得した。加えて、国際規格等に見られる機械安全についての体系の見事さを見るにつけ、機械安全こそ私の専門分野である行動分析学と親和性が高く、「協調安全」あるいは働く人中心の共存・協調作業に対する安全管理について、協力して何か有益な方策・対策ができそうだと感じている。

行動分析学では、人・動物などの「行動」を、刺激－反応の図式で明らかにし、個体を取り巻く過去及びその時の外的環境に行動の原因を求め、行動を「定量的に測定可能」なものとして取り扱う。ゴールは、行動の①予測と制御、②分析と定量評価、③問題の解決である。何らかの直接的な働きかけにより行動そのものを変化・修正するというよりも、独立変数（環境）を操作することにより従属変数（行動）を変容させることに主眼を置く。通常、「行動する理由」を語る時、行動する前の事象に焦点を充てがちである。例えば、「映画が好きだから映画を見に行く」などである。一方、行動分析学では、行動“後”の環境の変化でその行動が将来的に維持・増強・減衰・消去され、行動の生起を A：先行刺激（Antecedent）、B：行動（Behavior）、C：結果（Consequence）との相互作用で説明する。例えば、作業現場で「機械を掃除する」行動を説明すると、A：作業現場で、B：機械を掃除する、と、結果として C：上司に「ありがとう！」や「掃除しないで、本来の）仕事をしろ！」と言われる（図－1）。行動の前の先行刺激（A）は、合図でしかない。上司

に「ありがとう！」と言われれば、機械を掃除する行動は増え、「仕事をしろ！」という叱責後には減少または消滅する。これが行動分析学の中心的な概念であり、行動随伴性と呼ばれる。

現在、我々の研究チームでは、職場の働く人の Well-being の定量化を行っている。Well-being（以下、WB と称す）は、「持続的な幸福感」を指す概念であり、様々な要因の集合体である。我々は、職場が「安全・安心」であることで感じる幸福感と、「生きがい・働きがい」の幸福感に大別している。しばしば、WB は「曖昧模糊として実体がつかめない」「主観的ゆえに計測は不能では」という問いを頂くが、実験デザインを工夫することで、WB の定量化がある程度実現している。しかしながら、定量化は、職場のその時点での「見える化」でしかなく、評価になりえても、問題解決にはつながらない。真の目的は、職場の WB の「最適化」であると我々は考えている。この最適化に行動分析学を応用し、低い WB 要因を高め、高い WB を維持する方法を構築している。このチャレンジが、職場の快適性や、働く人の WB の向上に少しでも寄与することが我々の研究の最終ゴールでもある。



図－1 行動分析学の ABC モデル（行動随伴性）